十八史略

管鮑之交　―　現代語訳　―

【第一段】斉は（君主の姓が）姜姓であった。桓公の代になって諸侯の旗頭となった。春秋時代の五人の覇者は桓公を始めとする。名は小白。兄の襄公は無道（で道に外れた暴虐な行いをする人）であった。（そのため）多くの弟たちは禍が自らの身にふりかかることを恐れた。（弟の一人である）子糾は魯に逃げた。管仲はこの子糾の守り役であった。（一方、同じく弟の一人である）小白は莒に逃げた。鮑叔はこの小白の守り役であった。（その後）襄公は（もう一人の）弟の無知に殺され、その無知もまた（ある）人に殺されてしまった。（そこで）斉の国の人々は小白を莒より呼び戻し（君主にしようとし）た。そして魯の国もまた（自国に亡命していた子糾を君主にしようと）軍隊を派遣して子糾を送り込んできた。管仲は以前莒（から斉に通じる）道（で小白の行く手）をふさぎ、小白を（矢で）射て（それが）帯を締めるための金具に当たったことがあった。（君位継承問題は、結局、）小白が先に斉に入国して即位し（斉の君主となっ）た。（これが桓公である。）鮑叔牙は（桓公に）管仲を推薦して政治を執り行わせた。桓公は怨みを捨てて管仲を重用した。

【第二段】管仲は字を夷吾といった。以前、鮑叔と商いをしたことがあった。その利益を分配するのにあたって（管仲は）多く自分に利益を与えた。（だからといって）鮑叔は（管仲を）欲深いとは思わなかった。管仲が貧しいことを知っていたからである。以前（管仲は鮑叔のために）物事を画策して（かえって失敗して鮑叔は）行き詰まり苦しんだことがあった。（だからといって）鮑叔は管仲を愚か者だとは思わなかった。時によい時と悪い時があるのを知っていたからである。（また管仲は）以前三回戦って三回とも敗走したことがあった。（だからといって）鮑叔は管仲を臆病だとは思わなかった。管仲に年老いた母がいることを知っていたからである。（だから）管仲は言った、「私を生んでくれたのは父母であり、私を最もよく理解してくれているのは鮑君だ。」と。

【第三段】桓公が諸侯を集め合わせて、天下を統一し乱れを正したのは、みな管仲の策略によるものだ。（そこで桓公は）一にも仲父、二にも仲父といった。